

平成 20 年 11 月 20 日

創発型・地域密着の福祉作り～個人のニーズから始まる事業展開～

NPO 法人ふわり 社会福祉法人 むそう 戸枝 陽基さん

井上先生の社会起業家養成プログラムの紹介の講義で戸枝さん講義を東工大で聞いた。戸枝さんは障害者を施設に送るのではなくて、障害者が地域密着の仕事をしながらか生活をするという画期的な方法を支援する団体を作った人だ。彼は 6 年間従来の施設に勤めていたが、障害者をいわば力づく、たとえば、ドアに鍵をかけたり、暴れたら薬を投与するなどの方法に疑問を持ち、働ける障害者をもっと社会の中で自立させていこうと考えのもとで活動を広げた。旨くまとめるのに時間を費やせないで、講義で私に関心を示して書き下したものを記録しておくことにする。

- ・ 特別な支援が必要な障害者はごく少数であり、ほとんどの障害者は一般人を巻き込みながら生活をしたほうがはるかに効果的。なぜなら、障害者を集めて、支援しようとするとう障害者が本来出来ることもできなくなってしまうから。また、日本の従来の考えであるが、障害者を支援しなければならぬという動機が、障害者を中心としたコミュニティーが発生する。また、これはお年寄りにも言えて、元気なおととしよりは働きたいと思う人も多し、顕著な例だと 70 歳でヘルパーの仕事をし、84 歳で事業を立ち上げた人もいる。→私が井上先生の授業で行われている社会起業のアイデアが働きたいという高齢者と家事をして欲しい子供を持つ家族のニーズをマッチさせるようなものを考えているので高齢者の話は非常に興味部深かった。
- ・ 北欧などの福祉が発達している国では障害者働く必要がないが、日本の障害者は政府の補助金だけでは十分に暮らしていけず働らかなければならない。働く障害者という意味では日本は進んでいるのではないか。→障害者に限らず働くということはある種の生きがいに繋がるのでとても重要。実際に働く場所を提供しているのが素晴らしいと思った。
- ・ ターゲットは、市場で儲かるか儲からないところのぎりぎりのラインで、個別の小さな問題を中心にしている。ただ、大きな儲気にならないところが重要で、支援者にとって儲からない分、別のやりがい(大きな)を求めるのが難しい。
- ・ 事業費 3 億円のうち、6 割が補助金。しかし、障害者に補助金が出るのはあたりまでのことであって、むしろ補助金がでないともはや国として成り立っていないことになる。与えられた補助金をいかに効率的に使うかが重要。→私の研究が林業であって、ある地域では補助金だけで成り立っている地域もあることがわかった。補助金の意味について再考させられた。
- ・ いままでの障害者福祉は経営という概念がなかったが、この事業は経営、つまり、いかに効率的に予算、補助金を使うかというのが組み込まれたことが大きい。→完全には官から民に移行することは出来ないと思うが、予算も少なくすみ、障害者の満足度もあげられるというまさに社会起業家の顕著たる例だと感じた。

さいごに、戸枝さんのお話を聞いて感じたことは社会企業化が社会に与える影響が私が想像していたよりもはるかに大きいということ。戸枝さん自身もよく厚生労働省の役人に自ら出向いて積極的に話を聞いてもらおうと努力したけつ、「自立支援法」が作られた。また、なにか新しいことをするということはとてつもないエネルギーが必要だが、もしそれが成功すれば、社会貢献度、自分自身の満足度など得られるものはかなり大きいと魅力も感じた。